

昭和初期の児童文集と綴方教育実践
— 「光丘文庫」所蔵資料から —

白旗希実子

東北公益文科大学総合研究論集第35号別冊 抜刷

2019年3月10日発行

研究ノート

昭和初期の児童文集と綴方教育実践 — 「光丘文庫」所蔵資料から —

白旗希実子

1. はじめに

1-1. 研究目的

本稿は、「光丘文庫」に所蔵されている児童文集・綴方教育に関する資料を紹介し、山形県庄内地方における昭和初期の綴方教育実践について整理するとともに、その検討を試みることを目的とする。

1-2. 先行研究

日本作文の会編（1958）によると、1935（昭和10）年前頃の文集は、「学級や学校の生活の現実のなかから生まれた児童・生徒たちの文化の成果」であり、「貧困な農村の子どもたちの読み物であり、生活の指導の材料ともなったし、他地域と文化の交流の役めも果たした」とされる¹。

文集は、「教材として文章表現指導に役立て、学級経営に役立て、家庭との連絡通信に役立て、読物としての機能をもたせるなど、多目的に使用されてきた」²。滑川（1983）によると、文集の題名で多いものは、「①動植物名をふくむ自然風土に因んだもの」、「②郷土性のあるもの」、「③子どもの生活」、「④象徴的なもの」、「⑤指導性のつよいもの」であるという³。文集制作は、「昭和初頭から、日中戦争のはじまる昭和十二年ころまでもりあがって、以降戦時中下降線をたどり」、「生活綴方事件による意欲喪失と用紙の入手難」により、「十七年以降は急速に消滅状態」に近くなった⁴。こうした「文（詩）集に収載された文章や詩は、それぞれの時代の作文教育の思潮や文章観が反映しており、またその時代の生活と、青少年の考え方・感じ方がうかがえる点に大きな意義がある」とされる⁵。

¹ 日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書出版株式会社、1958年、p.573。

² 滑川道夫『日本作文綴方教育史3<昭和篇I>』国土社、1983年、pp.464-465。

³ 同上、pp.498-499。

⁴ 同上、p.476。

⁵ 日本作文の会編、前掲書、p.572。

2. 調査概要

山形県酒田市にある「光丘文庫」（中町分館）において、昭和初期の尋常小学校・高等小学校における児童文集・綴方教育に関連する資料の収集を行った。その結果、今回所蔵を確認した児童文集は34冊であった⁶。本稿では、『児童文集』、琢成尋常高等小学校の『我が校の國語教育〔原文ママ〕』⁷、工藤恒治『郷土主義學級經營の實際〔原文ママ〕』を中心に、当時の綴方教育実践について検討する⁸。なお、注釈や〔原文ママ〕表記のない限り、引用箇所及び著書名・文集名は、現在の表記に置き換えている。

3. 昭和初期の児童をめぐる社会環境と綴方教育実践の概要

昭和初期の経済恐慌は、東北地方の農村に大きな影響を与えた。山形県でも「市町村税の滞納がふえて市町村財政がゆきづまり、小学校教員の俸給不拂い」が相ついでおこり、「欠食児童が続出し、身売りに出される児童まで出てくる有様であった」⁹。酒田でも「景気の停滞は続き、昭和九年は更に異常気象によって、雪害・風害・水害・冷害に見舞われ、農作物が大きな被害」を受けている¹⁰。

こうした状況下、東北地方では、1929（昭和4）年ごろから1937（昭和12）年ごろにかけて、生活綴方を中心とする教育運動である「北方性教育運動」が展開された¹¹。この流れのなかで、成田忠久が創立した北方教育社は、1930（昭和5）年に『北方教育』を創刊している。工藤恒治は、この『北方教育』の社友であった¹²。当時の生活綴方の潮流としては、「観察する綴方」や「調べる綴方」の実践があり、山形県の綴方教師たちの実践にもはめこまれていったとさ

⁶ 『鮑海児童文集』は、号ごとに全学年分の文集が簡易製本されて所蔵されている。

⁷ 本資料は、発行年不明の昭和期となっているが、『鮑海児童文集』への言及があるため、1935（昭和10）年以降発行で、「尋常高等小学校」という名称から、1941（昭和16）年の「国民学校令」より前の資料であると推測される。

⁸ 資料撮影については、申請の上、承諾書を酒田市図書館・光丘文庫よりいただいている。なお、引用については光丘文庫に確認を行っている。

⁹ 山形県教育委員会編『山形県教育史 通史編 中巻』山形県教育委員会、1992年、p.406。

¹⁰ 酒田市史編さん委員会『酒田市史 改訂版・下巻』酒田市、1995年、p.663。

¹¹ 日本作文の会編、前掲書、p.580。

¹² 成田忠久監修『手紙で綴る北方教育の歴史』教育史料出版会、1999年、p.68。

れている¹³。

昭和初期は、庄内地方においても郷土調査や郷土読本の作成などが行われ、「郷土教育」が盛んになった時期でもあった。工藤の『郷土主義學級經營の實際』は、こうした郷土教育の盛んな時期に刊行されている。

4. 「児童文集」からみる綴方教育実践

4-1. 「児童文集」の特徴

表1は、光丘文庫において所蔵を確認することができた昭和初期の『児童文集』の一覧である（空欄は不明箇所）。文集のタイトルをみると、「青い花」「山彦」「さかえ」「ふたば」「海なり」など、自然風土に因んだものや郷土性のあるものが並んでいる。例えば、琢成第一尋常小学校『海なり』及び新田尋常小学校『さかえ』創刊号の編集後記では以下のように述べられている。

「『海なり』海近くすむ私たちには、ほんとなつかしい名です。海は千萬年も前から、あゝして、ゴ－ゴ－と大きないびきをかいて眠つてゐるのです。いつ眠りをさますことか？〔原文ママ〕」（琢成第一尋常小学校の『海なり』創刊号）¹⁴

「酒井新田の『酒井』が『さかえ』に通ずる。校運が年と共に進展すると同様、歓喜の中に生れた愛しの幼子も今後益々健やかに成長していく様に『さかえ』と名づけたのです。〔原文ママ〕」（新田尋常小学校の『さかえ』創刊号）¹⁵

次に、表紙絵をみると、琢成第一尋常小学校『海なり』（創刊号）には、郷土の風景と考えられる教師作の絵が描かれている。また、『飽海児童文集〔原文ママ〕』の表紙・カットは、琢成尋常高等小学校の高等科の生徒が描いたものとされ¹⁶、児童・魚・飛行機・電車・船・海などが描かれている。その他の文集でも、山や海などの自然の表紙絵がみられた。

¹³ 山形県教育委員会編、前掲書、p.463。

¹⁴ 琢成第一尋常小学校『海なり』創刊号、1933年、p.56。

¹⁵ 酒井新田尋常小学校『さかえ』創刊号、1934年、編集後記。

¹⁶ 飽海小学校長会『飽海児童文集』第三号尋二の巻、1937年の裏表紙裏などにその旨が明記されている。

表1 光丘文庫に所蔵されている文集

資料名(文集)	作成者	年代
学級児童文集尋常科第二学年丙組	琢成第一尋常小学校	昭和5年度
海なり創刊号	琢成第一尋常小学校	昭和8年3月
ふたば第四号	亀ヶ崎小学校綴方研究部	昭和9年2月
さかえ創刊号	酒井新田尋常小学校	昭和9年2月
さかえ第三号	酒井新田尋常高等小学校	昭和10年2月
やまびこ新年号	琢成第二尋常小学校	昭和3年1月
やまびこ琢成第二、四年	琢成第二尋常小学校	昭和8年8月
山びこ尋二		昭和9年2月
やまびこ	甲組～丁組	昭和10年2月
山彦(低学年)	琢成第二尋常小学校	昭和11年3月
山彦(高学年)	琢成第二尋常小学校	昭和11年3月
飽海児童文集創刊号尋二の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号尋三の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号尋四の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号尋五の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号尋六の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号高一の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集創刊号高二の巻	飽海小学校長会	昭和10年9月
飽海児童文集第二号尋二の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号尋三の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号尋四の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号尋五の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号尋六の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号高一の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第二号高二の巻	飽海小学校長会	昭和11年9月
飽海児童文集第三号尋二の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号尋三の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号尋四の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号尋五の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号尋六の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号高一の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
飽海児童文集第三号高二の巻	飽海小学校長会	昭和12年11月
上田校青い花第二十二号	上田小学校	昭和14年5月
上田文集第二十三号	上田尋常高等小学校	昭和14年11月

※文集名は現代語表記

4-2. 『飽海児童文集』からみる綴方教育実践

『飽海児童文集〔原文ママ〕』は、飽海郡の各学校の児童の綴方が掲載されており、綴方を通して学校間交流が行われていたことがうかがえる。光丘文庫には、創刊号から第3号までが所蔵されており、各号には飽海小学校長会会長の巻頭言が載せられている。以下は、巻頭言を一部抜粋したものである。

「文章は人格のあらはれであります。…皆さんが文章の道に精進することは皆さんのあらゆる能力を練磨し創造の力をたかめ、人格の完成に努力することではなればなりません。〔原文ママ〕」（創刊号・尋四の巻）¹⁷

「いろ／＼なもの、観方や感じ方や人生に對する考へ方などは、みんな自分の心から自然に生まれて來る潑瀾たる純眞なものでなければなりません。…（中略）…立派な文章を書く人は、正直な、素直な、純眞な心をもつて、もの、正しいあり方を、人生の正しい姿をよく感じ、深くみきはめることの出来る人でなければなりません。〔原文ママ〕」（第二号・尋四の巻）¹⁸

「…吾々は心によい花を植ゑ心を美しくし豊かにして生活することは綴方が上手になる最もよい方法です。〔原文ママ〕」（第三号・尋五の巻）¹⁹

巻頭言からは、綴方教育を通して、児童の内面に働きかけていこうとする指導方針が垣間見える。そして、それを通して、「人格の完成」を目指す方向性が述べられているが、そのなかで、「心から自然」、「純眞な心」など“心の自然性”にも言及していることがうかがえる。

次に、『飽海児童文集』における児童の作文タイトルの3年間の推移を、尋常小学校の2学年を例にまとめてみると、タイトルに含まれた単語で多くみられたのは、「うさぎ」・「ねこ」・「ほたる」などの動物、「えんそく」、「ひこうき」、「へいたい」などであった。また、文集のタイトルと作文の内容から、題材を大きくテーマごとにわけてみると、「遊び」、「動物」、「自然」、「乗り物（飛行機など）」、「季節行事」、「学校行事」、「家・家族」、「兵隊」、「その他」に

¹⁷ 飽海小学校長会『飽海児童文集』創刊号尋四の巻、発刊の辞。

¹⁸ 飽海小学校長会『飽海児童文集』第二号尋四の巻、巻頭の言葉。

¹⁹ 飽海小学校長会『飽海児童文集』第二号尋四の巻、巻頭の言葉。

大別できた。全体を通して「遊び」（かくれんぼ、ほたるがり、山あそびなど）・「動物」（うさぎ・ねこ・ほたる・きんぎょなど）をテーマにした綴方が多くみられた²⁰。なお、「へいたい」・「ヘイタイ」・「兵隊」が題名に含まれる綴方は、第3号で増え、122作中15作となった。第3号の時点で、関心の高いテーマの1つであったことがうかがえる。

5. 琢成尋常高等小学校における綴方教育実践

琢成尋常高等小学校では、学校文集『琢成文集』を1932（昭和7）年に創刊し、年2回（『飽海児童文集』創刊後は年一回）、4年以下・5年以上の二部に分冊して発行していた²¹。その目的は「児童の創作心並に鑑賞力を養成し兼ねて情操の陶冶に資す〔原文ママ〕」ことであり、「綴方教科書として児童綴方生活の指標たらしむべきものである〔原文ママ〕」とされている²²。

利用方法としては、「全児童に配布し一は補充教授の便に供し一は児童課外読物の資とす〔原文ママ〕」ること、「綴方教授時間に鑑賞、批評用として使用する〔原文ママ〕」こと、「高学年に於ては文集の批評を記述せしめ、議論文、感想文の指導に當る〔原文ママ〕」ことが挙げられている²³。このように、文集が綴方教科書として、児童の読み物として、多方面で活用されていたことがうかがえる。

琢成尋常琢成高等小学校では、綴方教育の目標と態度として、（1）個性尊重の教育としての綴方教育、（2）生活教育としての綴方教育、（3）純正なる國語陶冶としての綴方教育の3点を挙げている²⁴。

（1）「個性尊重の教育としての綴方教育」では、「…生活表現は現實に於ける各見各様なる個性を基調とするものなるが故に、純眞にして素朴なる人間性の純粹なるものを尊重する一面に於て野性的なる放縱性、利己主義等このましからぬ人間性を陶冶し、『萬人の定規ともなるべき個性』に修練し、統一ある

²⁰ いくつかのテーマにまたがる綴方もあるため、厳密に種別化することは難しいが、主な内容で大別すると、尋二の巻の創刊号から第3号では、動物・遊びをテーマにしたと思われる綴方が約4割を占めていた。

²¹ 琢成尋常高等小学校『我が校の國語教育』年号不明（昭和期）、p.17。

²² 同上。

²³ 同上。

²⁴ 琢成尋常高等小学校、前掲資料、pp.1-3。

調和ある健全なる生活を営ましめ、健全なる社會生活の基礎たらしむるものである〔原文ママ〕とある²⁵。児童の人間性を尊重しつつも、綴方教育を通して「このましからぬ人間性」については陶冶し、「健全なる生活」を営むように働きかけることで、将来の「健全なる社会生活」の基礎となることが目指されている。

(2)「生活教育としての綴方教育」では、①「綴方教育は児童生活表現の指導にあるが故にその生活發展の自然性に留意し、他教科との連絡を緊密にし、生活の一面に偏することなき全面的展開擴充の指導にあたること〔原文ママ〕」、②「児童の生活は時代及び環境の掣肘を受くるが故に〔原文ママ〕」「1. 時代の掣肘²⁶を受くる児童生活の陶冶に務むること〔原文ママ〕」、「2. 環境の掣肘を受くる児童生活の陶冶に務むること〔原文ママ〕」、③「児童の純眞性を明朗、快活、率直なる形態の上に把握し、暗黒、陰慘、醜惡なる表現に對しては個別にそれを指導し児童本来の純眞なる生活を學ばしむる様務むること〔原文ママ〕」、④「自然を友とし、自然に親しむ生活を尊重し、正しき自然觀の養成に務むること〔原文ママ〕」などが挙げられている²⁷。

②の2の「環境」については、港町として發達した商業都市の児童は軽快で明朗なる純眞性を有するが、「熟慮靜思する性格に乏しく、その生活は内省的、思索的ならざる欠陥を有するが故に〔原文ママ〕」、「特に内省的、思索的にして質朴なる生活への訓練を重視するものである〔原文ママ〕」と述べられており、重視することの1つとして「觀察の訓練」が挙げられている²⁸。綴方教育において、觀察すること、内省することが重視されていたことがうかがえる。

(3)「純正なる國語陶冶としての綴方教育」では、「正しき國語を使用し『平易ニシテ旨趣明瞭ナル』文章〔原文ママ〕」を記述させ、「正しき國語愛の精神を育成すること〔原文ママ〕」と述べられている²⁹。

このように、当時の綴方教育においては、主に「健全なる」生活の陶冶を目指そうとする指導と、正しい文字・記号の使用や標準語の使用などを目指す

²⁵ 同上、p.1。

²⁶ 「時代の掣肘」については、時局に関する綴方の指導方針が示されている。

²⁷ 同上、pp.1-2。

²⁸ 同上、p.2。

²⁹ 同上、p.2。

「純正なる国語陶冶」が行われていたことがうかがえる。

5. 工藤恒治『郷土主義學級經營の實際』における綴方教育

『郷土主義學級經營の實際』は、1932（昭和7）年に発行されたものである。工藤は、問答の形で、第1章「郷土主義・學級經營〔原文ママ〕」において、郷土教育は、「結局、子供達に、その郷土に於て、その郷土に據り、生きてゆく能力を修得することをその目的とする〔原文ママ〕」と述べる³⁰。また、學級を団体として捉え、「お互が、お互に、生きる能力を修得するための、團體としての學級生活には、協議や共同が重んじられて来る〔原文ママ〕」と述べている³¹。第1章からは、工藤が生きていく能力の修得を重視していることがうかがわれる。

著書のなかで工藤は、「文集」を出す理由として、「1. 發表機關として〔原文ママ〕」、「2. 鑑賞機關として〔原文ママ〕」、「3. 生活指導の機關として〔原文ママ〕」、「4. 各教科の指導機關として〔原文ママ〕」の4点を挙げている³²。

工藤は、文集『遠街^{をんがい}〔原文ママ〕』を例に実践を紹介している。創刊号からの「児童のまとめたもの〔原文ママ〕」が載せられており、「…だいのつけ方が上手だと感じた〔原文ママ〕」、「…さんの櫻の花に對する愛情があらはれていて讀でいるとまぼろしとなつて見えてくるやうな感じがした〔原文ママ〕」など、児童が文集作成に関わり、文集について批評をおこなっていたことが、ここからうかがえる³³。

通常号の他に、増刊や、修学旅行記年号、夏の生活号、『舞踊の夕』記年号、『鶴岡の文化』号、『郷土の童謡』号、『童謡』号、『私の讀物』号、『村の長所短所』号、郷土研究号、高山樗牛号なども作成され、郷土を調べた綴方の特集号も組まれていた³⁴。

また、工藤は、第4章「低學年の郷土主義學級經營〔原文ママ〕」のなかで、児童の綴方を常に板書しているが、板書を児童が読んだり、話し合ったりする

³⁰ 工藤恒治『郷土主義學級經營の實際』文化書房、1932年、p.10。

³¹ 同上、p.15。

³² 同上、pp.197-198。

³³ 同上、pp.199-205。

³⁴ 同上。

なかで、「昨日の生活が、さながらに展がつてゆく〔原文ママ〕」とき、国語読本について考えると述べている³⁵。

「…讀本の文章は、無理にも我がものとして讀まねばならない。が、小供達の文章は既に我がものである。それで、小供達の綴つたものは、綴る力をより多く進める。昨日のアノことは斯く表現すべきものなることを會得する。即ち生活を如何に綴るべきや？ の修練となるのである〔原文ママ〕」³⁶

国語読本と異なり、綴方の作者は自分達であることから、「綴る力を多く進める」ことができ、自身の「生活」を如何に綴るべきか（表現すべきか）を修練することができるというのである。綴方の中で、「生活」を「表現する」ことを向上させていこうとする工藤の方針がここからうかがえる。

6. まとめ

本稿では、光丘文庫に所蔵されている綴方教育に関する資料について、「文集」を中心にその内容を整理・検討した。

庄内地域においても、文集は、綴方教科書、「生活」の指導、地域間の児童の交流の役目など、多目的に作成・利用されていた。文集名や表紙のイラストは郷土性のあるものが多くみられ、教師と児童によって文集作成が行われている側面もみられた。綴方の内容は動物・遊びに関するものが多くみられたが、1937（昭和12）年の時点で「へいたい」を題材にした綴方が増加している。

飽海児童文集や琢成尋常高等小学校の資料からは、当時の綴方教育の指導において、児童の自然性に留意しつつも、綴方を通して児童の「生活」を指導していこうとする側面が確認できた。

工藤の著書からは、児童の綴方教育を個人で完結せず、教室で共有化することで、児童の学び合いにつながっていく様子が見えてきた。工藤は、綴方のなかで、児童の「生活」を「表現する力」を向上させていこうとしていたと考えられる。しかし、今回の資料のみで工藤の捉える綴方教育の在り方を語ることについては限界があるため、この点は、今後の課題としたい。

³⁵ 同上、p.316。

³⁶ 同上。

本稿は、光丘文庫所蔵の資料紹介を主としており、その点で限界がある。今後は、他の庄内地域における児童文集・綴方教育に関する資料の収集をすすめ、本稿で明らかになった綴方教育実践が、綴方教育の歴史のなかでどのように位置づくのかについて検討をすすめることを課題したい。

謝辞：資料収集にご協力いただいた酒田市の光丘文庫の職員の皆様に感謝いたします。